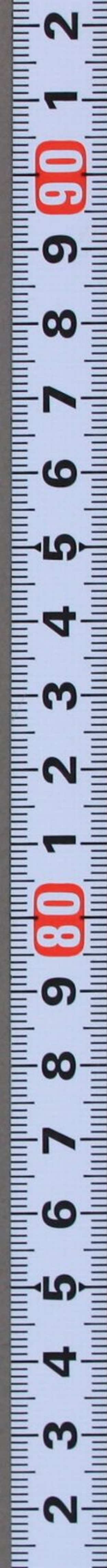


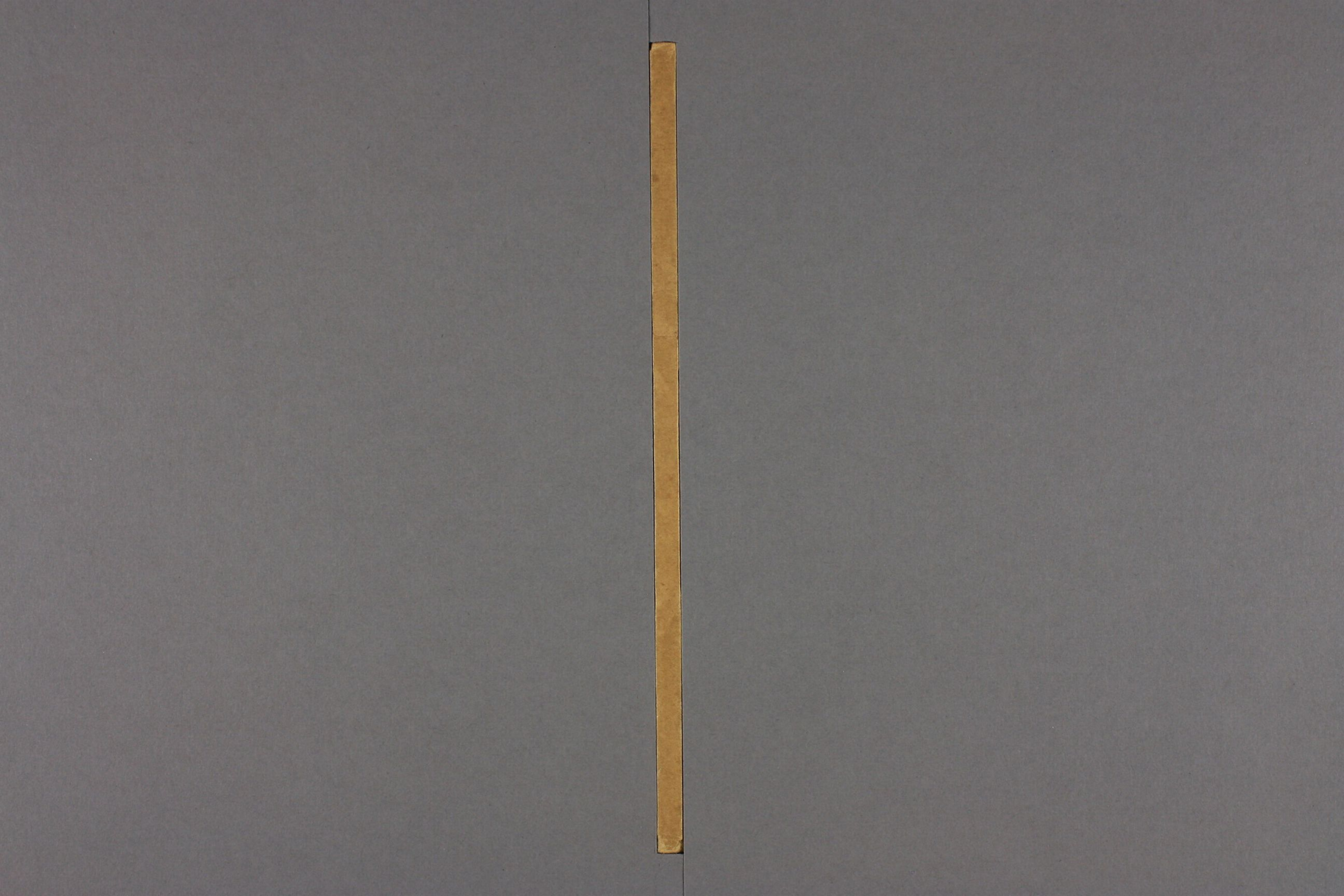


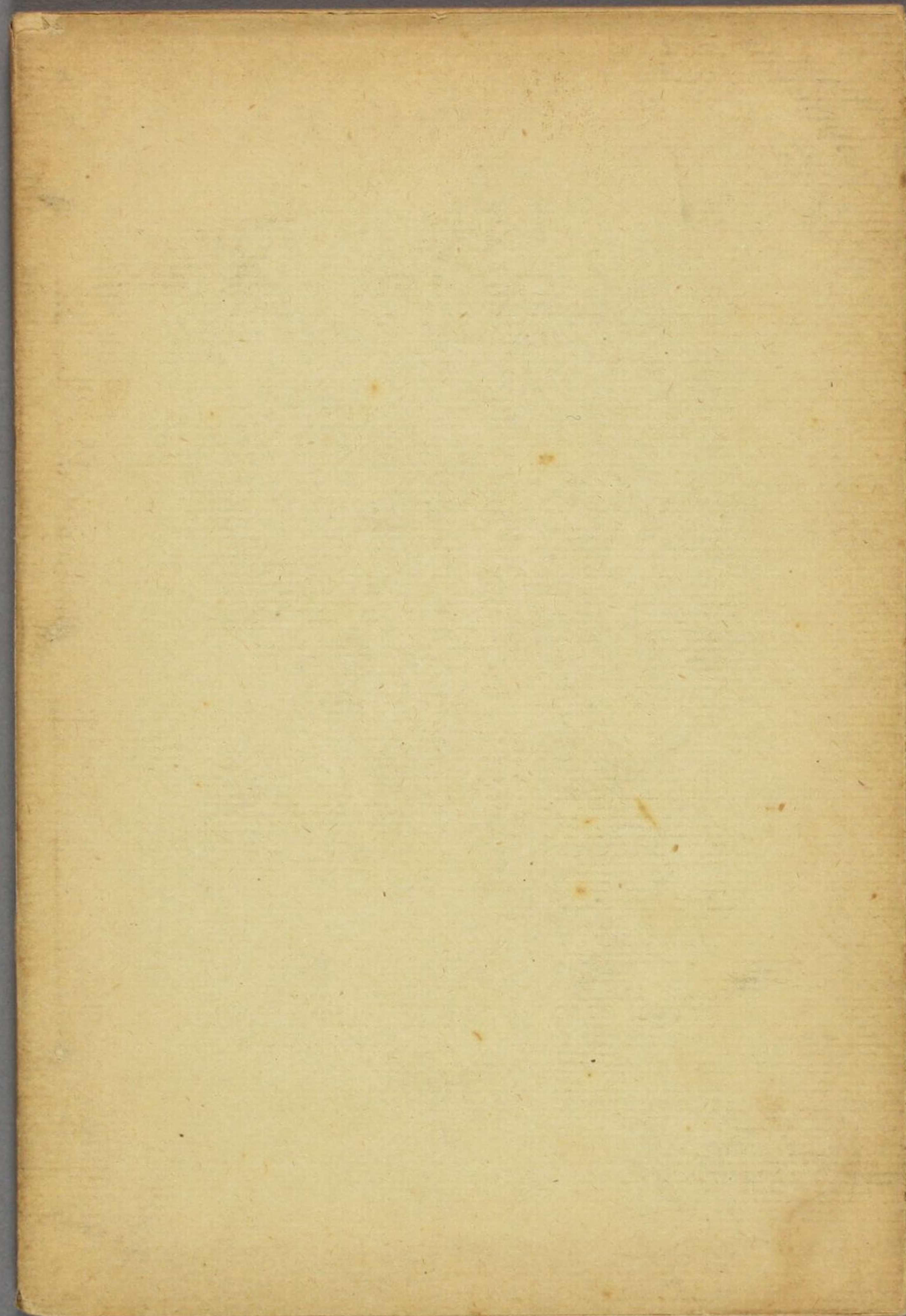
西
灘

佐
藤
清
著

子







佐藤清著

西

灘

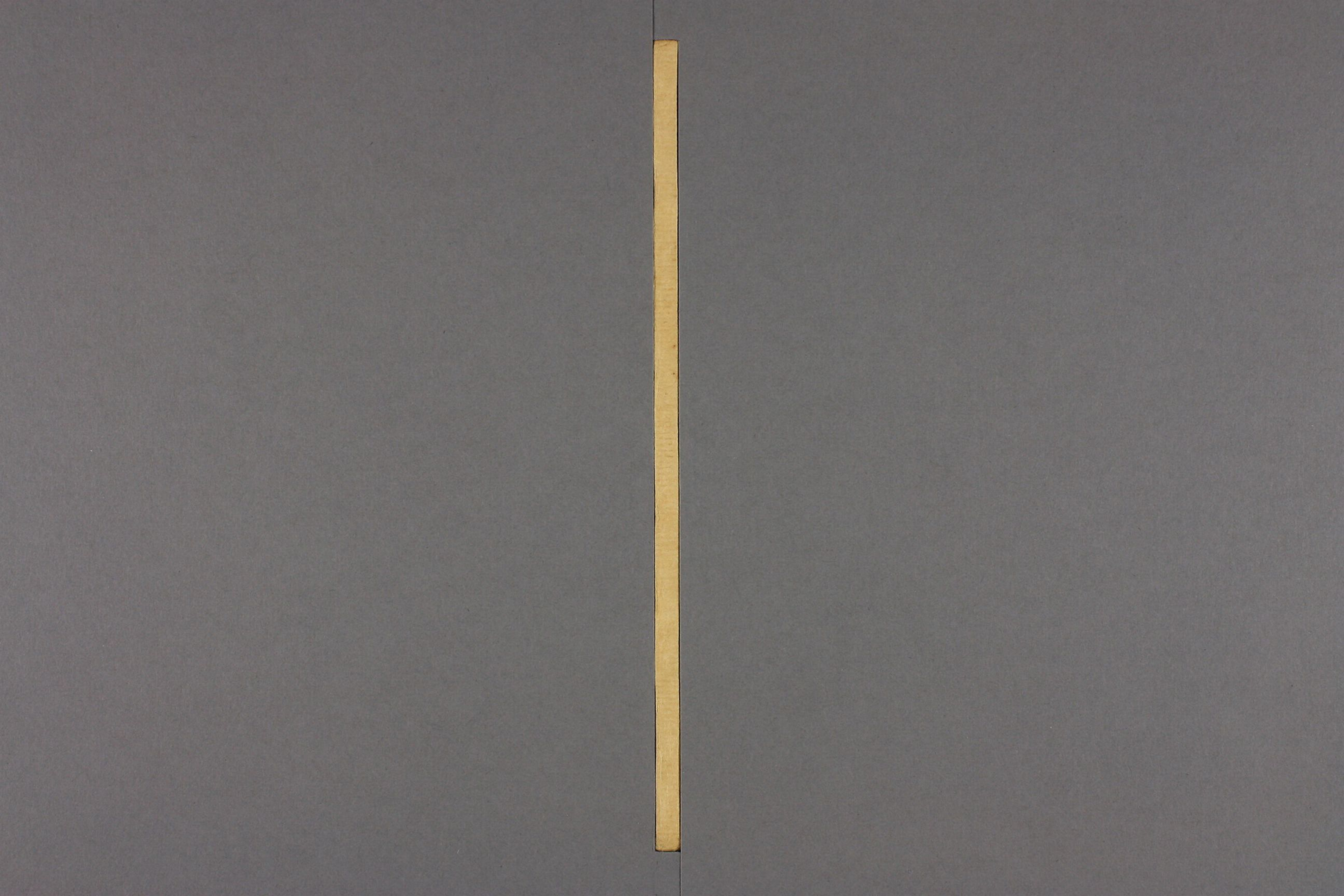
子

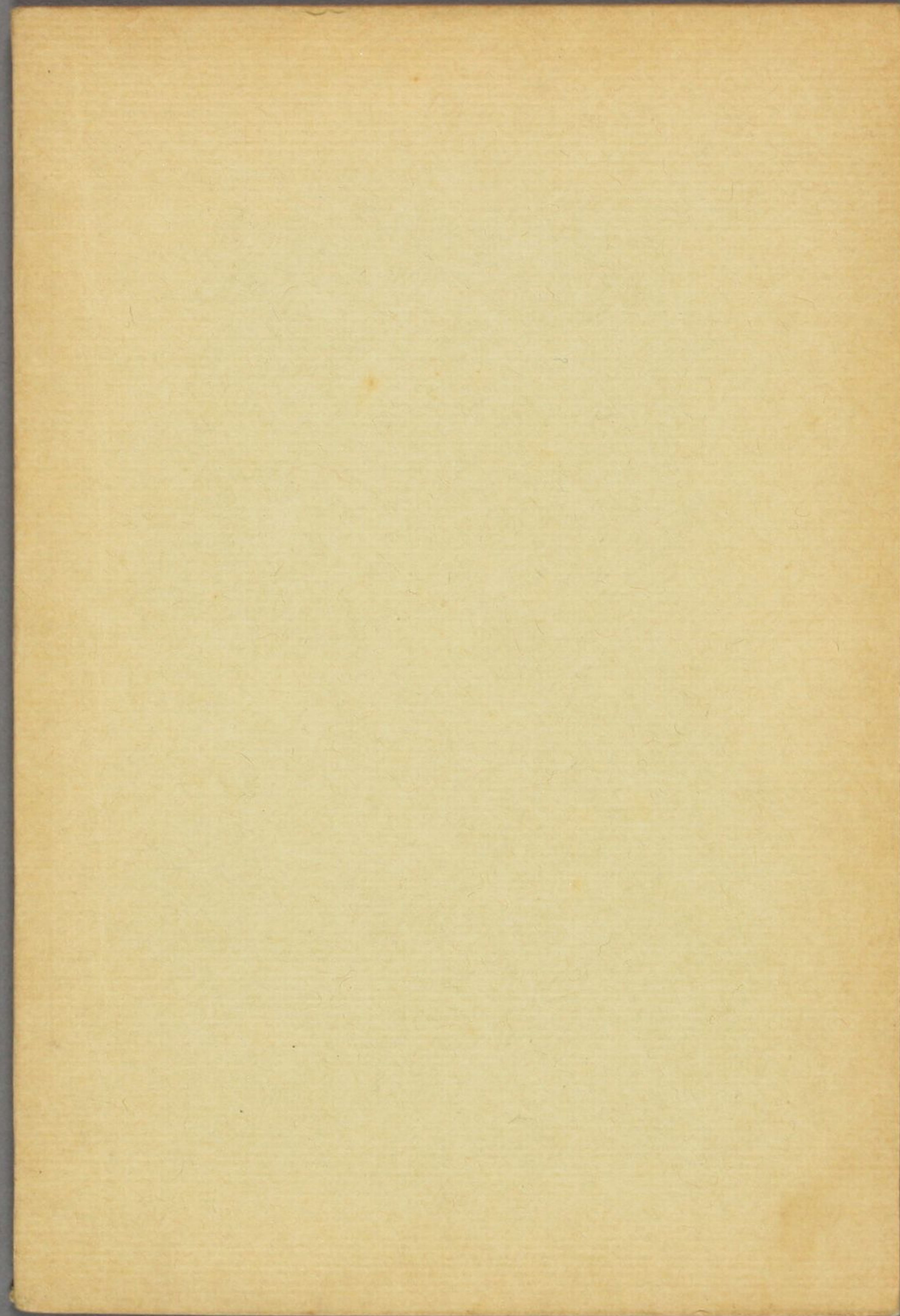


佐藤清著

西灘

子





西
灘
よ
り

佐
藤
清

銀のやうにひかる白帆のかげ即ち愛く、
忽ち深き濃藍即ち悲みのために消えてゆも。

＊

苦みは人をにくむ心と共に生れ、
喜びは人を愛する心と共に生る。
あゝされどこの呼吸するさへ苦き心は、
おん身を愛するほのほより生れ來れり。
主よ、感謝す、我は今主の御苦みを味ふ
杯を唇にあて得ることを。

＊

心ない世の中からうけるくるしみのかげは
そのうつくしい顔と心をいくたび蔽ふたらう。
いぢらしいと思ふとお前のくるしみは、
火のつくやうにわたしのくるしみとなる。

＊

わが靈の奥に三つの墓あり、
一つは野のはての野菊咲く岡、
秋の薄き日のさす所に立てり。
一つは紫の咲く静かなる入江、

春の日のあたゝかにさす所に立てり。

一つは青薄^{あをすき}しげる杉苗の山、

夏の雨のそゞ湖水のほとりに立てり。

あはれこれらの墓をおとなふことも稀にならば、

やがては無縁の塚とならむ日も遠からじ、

かくてわが靈は日々にすさみ衰へ、

狐狸すむすみかともなりぬべし、

あゝわが靈の奥に立てる三つの墓よ……

＊

この海の色のかはるやうに

わたしの心の色もたびくかはる、

光が陰にまじる時は、

男のつよい決心と熱情が燃え、

陰が光にまじる時は、

女のやさしい躊躇と涙が流れる、

わたしは今この海のかゝみの前に立ちて、

わたしの心のすがたをそのまゝに見る。

＊

雨はやがて海のおもてより退き、

白雲は空を蔽うて走り来る、

雲は水にひたり、水にひたりつつ色を變じ、
空は忽ち細かき瑠璃の絹ぎれを飛ばす、
此時沖のかなたより白帆の浮び來るを見るは、
ゆくりなく戀人にあふよりもたのし。

＊

夕ぐれの雨むしあつくふりそゝぐ
わが行く道にしげれるひともとけやき、
うすらあかりと木の葉のかげど、
しづかにわが靈のなかにうちふるふ。
げに夕ぐれの色はわが靈をみちびき、

いのちの深きかなしき根源ねみなもとにあこがれしめ、
そこに立てるくらきものふるへるもの、
きづつきいたみ苦めるもの、靈にふれしむるなり。

＊

夕ぐれには路傍の人も我には母となり、
ふたりの妹いもうととなりて見ゆるなり、
夕ぐれにはわれ切せちに孤獨こどくに堪へざることもあるぞ、
夕ぐれにあらざれば路傍の人をも、
母と見、妹と見ることゆめあらじ、
夕ぐれの色よ、光よ、陰よ、

ヒューマニチーの浪をわが心の奥におくる夕ぐれよ、
或時は恐れ、或時は悲み、
或時はなつかしみつゝ、我は汝のふところに行く。

わかれ

＊

わがたよりなき羞耻のこゝろは、
おん身の前にふるひつゝあり、
いはんどせし言葉はゆくりなく姿をかへ、
いはずとものごとはおのづと口を走る、
ハンケチを落さんとするたくみはあれど、
羞耻のこゝろは手の筋肉をかたくせり、

わはれこの椽側えんがはに立てるふたりも、
 庭もその上の空も夕やみも、
 豆腐賣のいさましき聲も鐘のひびきも、
 見るがうちにかはりはつべし、
 されどわがたよりなき羞耻はぢのこゝろは、
 おん身の前にふるひつゝあり。



つひにこゝを去る日は來れども、
 おん身はつひに來らざるなり、
 我はくるしみて諸手もろてをねぢり、

荷物にものの上につめたき涙を流す。



我のこどくおん身を愛せしものありや、
 わらば我に告げよ我これと言はん、
 わが口は重くして言葉すくなく、
 言葉のいづるときはわらくして刺さあり、
 されど我の如く苦み、歎き、祈りしものありや、
 おん身のため、おん身の悲き家のため、
 そのうつくしき弟妹いもづこだちのため、
 おん身を愛するは苦むこと、

我は苦みなくして愛すること能はざるなり。

＊

我は泉のはどりに立ちてつるべをおとす、
つるべは深く入りて少しも答なし、
かくて我は碎けたるつるべを青草の上に投げ、
絶望のためににがき唾を呑む。

＊

音もなき憂鬱のさゝなみ、
しだいに沖よりすゝみ來り、
やがて惱亂の青みを加へ、

わこがれのしぶきをどばし、

ふかき情欲の暗流、

ややもすれば水面をうらぎる、

かくて一日にいくたびか干満する潮のさまを、

ひとりしづかに見つむる我を思へ

時には涙を流し歎息をもらし、

髪をかきむしりてこの海を見つむる、

わがたよりなき醜きすがたを思へ。

＊

わがいきの力にもたへざる羽蟲、

はた〜と赤き羽をひるがへし、
電燈の笠のめぐりを飛びめぐる。
わが靈とおなじ靈はそこに働き、
何をかゝるがれ何をか願ひ、
はては燃ゆる思にくるへるごとく、
はげしく羽をひるがへして飛びめぐる。
見るまに羽蟲はわが靈のなかに迷ひ入り、
わが靈は燃え、苦み、さわぎ、
熱き湯を手にとり、
羽蟲はやがて電燈の笠の下に死に、

わが靈はうなだれてわが前に眠れり。

靈

✽

わが目の海よ、
にぞれる海、血ばしれる海、
どんよりと動かざるわが目の海よ、
動くものどてはくらき雲、
かなしきかげ、罪のおもひで、
わが靈れいの空そらはそのまゝ、こゝにうつり、
晴るゝことなきかなしみに満てり。

＊

わがこゝろにもあぢさゐの花が咲く、
晝の雨、夜の雨、

むしあつたい雨、つめたい雨、

みどりの雨、黄いろい雨、あかい雨、

紺青の雨、かちいろの雨、

いろ／＼の雨のふるたびに、

虹のやうにあぢさゐの花が咲く、

わがこゝろにもあぢさゐの花が咲く。

＊

やもめごころのやるせなさ、

おのがこゝろのそのほかに、

こゝろをもたぬやるせなさ、

わかきみそらにめづらしく、

やもめごゝろのそのほかに、

こゝろをもたぬやるせなさ。

＊

空の色は海のおもてにうつり、
岸の樹木はながれの上におち、

わが歩み來りし過去の道は、
そのまゝ未來の鏡に映す、
おそれとはぢかなしみとまどひ、
罪と罰とはみなそこにあり。

✽

みどり葉を鳴らす風よ、
わが靈を動かす君よ、
さゝなみを走らす風よ、
わが靈に働らく君よ。

✽

かげはわが靈の畑地を走り去り、
見るまに山のいたゞきに登る。
光はうしほのおのづから湧くやうに、
しづかにしのびの軍勢のやうに、
忽ちそのうしろを追ひ、
わが靈のすがたをかふるなり。

✽

坂道の角をまがる時、
木の間がくれに赤白黄青なぞのいりまじる

數多き洋館のいぢるく、
日光をうけてかゝやけり、
わが靈の目にちらと反射して。

✽

雀はわがこゝろをつれて籠をまたぎ、
井戸のかたはらの批把にのぼる、
母は細き腕にてつるべをたぐり、
やがてそれを深き桶にそゝぐ、
血は蒼白き頬にのぼりゆき、
呼吸ははげしく胸に躍る、

雀はくるしみて鳴き、
羽をふるつてわがこゝろを追ひ出す。

✽

わが指さきのやさしき合歡の葉に觸れし時、
合歡の靈はふと驚いてふるひわなゝき、
かうべを垂れて死せるものゝ如くなれり、
合歡の靈よ、わがこひしき少女よ、
おん身のうちしをれたるさまを見んよりは、
合歡の葉かげのうつる池にいりて死なんこそよけれ。

夏の夜の常盤公園

十二時の鐘鳴れば星かげ空にかき消えて、
暗き空はおもく音なき洪水のやうに垂れさがり、
湖水は急に底をぬかれしやうに沈みゆく、
しげりあふ萩のしづく、芝生のしづく、
ふめば靴の底につめたくどほりつゝ、
かしらはやゝ貧血を感じて髪にちからなし、
どほくのほうに見ゆる杉の木立も、
にわかになが目の前に浮び出づ、

いづくともなく動揺するほのじろき光よ、
湖水のかなたになほ眠らざる電燈よ、
音のみして容易に近づかざる汽車のあかりよ……

*

われらのゆくすへは知りがたく、
はかりがたくたのみがたし、
たゞわれらの知るどころ、
はかるところたのむどころは、
われら互の靈にほりあてしものばかり、
たがひの靈のはなれざらんために、

かたく肉をむすばんと願ふは本能、
 本能の命にさからふ時、
 靈も肉とゞもに離れん、
 われらのゆくすへは知りがたく、
 はかりがたくたのみがたし、
 たゞ今はたゞわれらの靈のいきのうちに、
 のぞみと愛とよろこびをうくるなり。

秘密の花

＊

わが靈のいと廣き園よ、
 そこをかざるかをりたかきほこりの花、
 いろもまばゆきねたみの花、
 やゝいろあせしにくみの花、
 わが目はこれらの花をいやしむにはあらねども、
 ゆきてそのかげにいこはむ願ひつゆもたじ。

園のおくに色もなくしげりあひ、

雨のふらぬ日にもしづくを絶たず、

くらきかげのみをつねに地におとす秘密の花、

あはれその下草はあけくれ通ふわが足跡のために、

わがなみだのために、ためいきのために、

またけしがたき悔いのくるしみのために、

むごたらしくも踏みにぢられて萎れたれども、

わがいてふべきたゞひとつのかげよ、

秘密の花よ、やみの花よ、いろなき花よ、

わが園にかすくの花のたえざるかぎり、

いつまでもわがいてひの芝生となり、

わがすくひのかくれがともなりてあれかし。

＊

わがうまれしまちにかへりくれば、

不規則なる家並、きたなき共同便所、

道ゆく人々のなまり多きもの、言ひふり、

すべてわがこゝろにはちど不快の浪をおこす、

かの掘割のよどみて流れもやらぬ濁水は、

わがぬぐひがたき罪のむかしをさゝやき、

かの棟割長屋のなかば崩れ落ちたる壁の色は、

乞食こじきにもおとりしわが貧困の記念を示し、
 朽ちはてし古き教會堂のうしろ、
 クローバの青き女學校の庭のあたりは、
 やはらかなりしわが靈魂の柱に、
 今なほけしがたき鑿つみの香かをとむ、
 あはれわが心より全く消えうせし記憶よ、
 いかなればまたふたゝびさまづゝの形をとりて、
 それづゝのなげきとためいきとくいとはちとを我に與ふる。

*

行きつまりて破りがたき生活の道を

きりひらかれんのぞみもいまはなし、
 母もいもうとも口を開くことなければ、
 我も言葉のいどぐちを見出すをりを失ひ、
 口をひらくはやがてわがくるしみとなれり、
 さらば我はまたかへらん家なき國に、
 或時はうたがひ、或時は恐れ、
 或時はやるせなき思におびえつゝ、
 かの生立おいたちも氣質きざいも時としてはその言葉さへも、
 いひどきがたき多くの人々のむれのなかに、
 かへり行きていつまでもかへらざるべし、

行きつまりて破りがたき生活の道を
きりひらかれんのぞみもいまはなし。

＊

わがいとけなき心に、

夢と詩をあたへ、

そのさしに立てば、

いつも我に音楽をあたへし川よ、

今日はなにゆるか電車のさしる音よりも、

いたましきひびきを我に與ふる。

＊

いろ／＼の温度おんさをたもつ温泉いづゆのながれ、
わが靈のうちよりあふれ胸をあたゝむ、
まちわびし手紙の封をひとりさくとき。

＊

こゝしき岩ヶ根のはざまより、

湧き出づるたのしき温泉いづゆ、

人々はそこに浸りて夢を見るなり。

おん身のやさしき胸のなかより、

はとばしり來る靈の温泉いづゆ、

わが靈はそこに浸りて夢を見るなり。

✽

野より立ちのぼる青き煙、

しづかにのぼりて空の色にとけあふ、

わがおん身をしたふ思も、

しづかにのぼりてその靈にとけあふなり。

✽

かぐはしく熟れし葡萄の實、

わがこゝろのすみづゝにかをるなり、

われはおん身の葡萄に酔ひ、

あたらしきよろこびに生くるなり、

おん身はわがぶどうの實の靈、

生命と神秘との泉なり。

きえざる火

✽

わが零落を今なほ示す女學校よ、
うつくしきくちびるはあざけりにみち、
やさしきひとくの目は輕蔑にみたり、
われ鎌をとりておびえつゝその間を歩き、
ひもすがら大庭の芝生をくさざる、
をさなきもろてはあつき日と汗にもえ、

夕ざればおのれを失ひて庭にたふれぬ、
 あはれわがはちどかなしみの若き日よ、
 わが若き日のために植えおきし若き銀杏よ、
 七年を過ぎて今そのほどりにひとり立てば、
 銀杏は猶みづしくやさしき葉をひろげ、
 すいしき夕やみのなかにものやおもふ、
 されどわが若き日はわくら葉の落つるやうに、
 見ぐるしく蟲ばみて地に落ちん日も遠からじ、
 ふたたびくりかへしがたき若き日よ、銀杏の日よ、
 日日にほろびゆくわが若き日よ、蟲ばめる葉よ、

われは今涙を呑みて押しつぶされし若き日に別れをつげ、
 若き銀杏にわかれをつげてまたすすみゆかむ、
 いかにかさびしくかなしくたのむかげはなくとも。

*

やさしき靈はわが前を過ぎゆけり、
 わが靈はわが前を過ぎゆく靈に感じて、
 すすり泣くやうにひとりふるひ、
 はやて吹く船の上にすわりて、
 わたりがたきかなたの岸をながめ、
 そこを過ぎゆく靈に空しく思をおくる。

✽

めさむればわが本能はとどのひ、
わが靈はいとしづかなり、
光も風も木の葉も、
空の色も野のおもても、
いとしづかにふるひつつあり、
やがてわが本能は星のひびきのやうにふるひ始め、
湖水のごとくにしづまりし、
わが靈はさざなみをうちてふるひはじむ。

✽

そこどもなく動揺するほのじろき光、
悪鬼の顔にあるくらやみをどかして、
わが靈の森の全面になげうてり、
ほ―ほ：ほ―ほ：ほ―ほ：ほ―ほ：
石は夜の深うなるにつれてつめたく、
それをあらふながれは森のささやきにまじり、
路さへなきやみのわだなかをふるはせり、
ほ―ほ：ほ―ほ：ほ―ほ：ほ―ほ：
星雲のこりなせるややあかるきおび、

かつ消えかつながれて暗はやがてそこにあふれ、
まてどもまてどもわが靈の夜はいとくらし、

ほ―ほ：ほ―ほ：ほ―ほ：ほ―ほ：

＊

みづくしきわかき生命のちからを

おしつぷす手をゆるめざるかたくなの力よ、
こころ臆しがちのわがさみしさを知りてか、
なつかしき名となりいかめしき文字となり、
あるひは目にも見えす口にも言ひがたき思となり、
みづくしきわかき生命のちからを、

おしつぷす手をゆるめざるかたくなの力よ、
今しばしゆるめよそのかたくなの手を、
若き生命は今あるかぎりの力もて起きあがらん、
しからずば汝も我と共にほろぶべし。

＊

めさむればくらき夜をしめやかにふる雨のなかに、
いりまじる電車の深くうめくあらしのひびき、
わが性の力は鳴りを收めてその音に耳を傾け、
はげしく伸縮する神経に刺をさす音はわが心を奪ふ。

＊

かかるくるしみを忍びて、
またあはん日も知らず、
過ぎゆく汽車の窓より、
まぢ全體にわかれをつぐる、
この五時十分を君知るや。

＊

ただ一どきの物がたりに、
その人をうたがふくらきかげになやむ日あり、
ただ一ことゆきちがひに、

永くつづくべき友情の流れをさまたぐる日あり、
われら互の靈を見る目さへひらかば、
かかるわざはひより容易に免かれ得べきものを。

＊

いつ燃えそめしわが靈の火よ、
いくたりの靈のたきぎにやしなはれて、
今猶きえず清きはのほとなり、
しづかにいとおそかに燃ゆるなり、
あはれわが靈の火をやしなひしやさしき薪たきぎの靈よ、
今ははや燃えつきてあともなければ、

今わが靈の火を燃やしつゝあるものの、
火の種となり生命となり力となりしを思へば、
少しの灰をさへ残さで燃えつきしかなしさよ、
見よまひるのともしびのやうに弱き光もて、
あるかなきかのやうには見ゆれども、
ここにさわりしものはことごとく鉛のやうに、
藁のやうに松脂のやうにとけてきゆる、
くすしき力をかくすわが靈のはのほを、
今現にやしなふ薪の靈を祝福せよ。

悲しき断片

＊

かよわきわが目はかなしみ、
その力のふたたびかへらざるをなげく、
されど見よ宇宙のことごとくやみとなりてゆくを、
かよわきわが目はよろこび、
その力のふたたびかへり来るをたのしむ、
されど見よ宇宙のことごとく光となりてゆくを。

✽

旅に出づる日の新しきころ、
仲あしき人にもわが顔にあるよろこびの光をわかち、
言葉もていひがたき思をよせし人には、
せちなる思をあらはす短き言葉を分ち、
涙ぐみつつ時にはうちわらひつつ、
生活のさわだてる断片のさかづきを味ふ、
旅にいづる日の新しきころ。

✽

いつまでも旅のころにてあらまほし、

旅にあるわがころはいつもあたらし、
いつまでもなつかしき人を胸に忍がき、
地をめぐりてそれにあこがれつつ、
世を終ふるまで旅のころにてあらまほし、
人生はきわまる時なく、
目に映するものはただ悲しき断片なり。

✽

鍵盤の上にて思はずふれし指さき、
香水のしたたる夢はわが指さきにつたはれり。

＊

いとつよき心もこよひはかなし、
この岡にただひとりなればいとかなし、
をさなき日よりならはしどせるいのりも、
うちたえし今はこよひはかなし。

＊

船の上にてわが答を待ち設けし微笑よ、
そして答へざりし微笑よ、
わたしは今あのかたちよくふくらみし微笑を思ひ起して、
ひそかに答へざりし微笑をあはれむ。

海の夢

＊

光はほつかりと白くくもれる海にさし、
いまさめし目に淡夢のころよさ、
うすもやのかげより浮ぶ白帆とともに、
このゆふぐれの音おともなく……

＊

しづかにのぞくをんなのかほのにはひにも、

目をばひらかぬ海のすふオゾンのいきに、
ガスの火のたどくしくも咽びつつ、
夢のあかりを目の上に……

*

おだやかに動悸うつ海の夢、
にはひこぼるるみどりの靄につつまれて、
いつもかはらぬ若き日のよろこびにいきいきと、
おだやかに動悸うつ海の夢。

*

夢みる海のいと深き紺青のふかみをさして、

およぎいるうろくづよわが空想よふかく行けかし、
そこには目にて見られぬ人の世の密かなる愛の歎きと、
失へる愛の痛みと未つひに得られぬ愛の絶望と、
味なき鹽の踏まるるよりも道に踏まるる耻辱はなきや、
夢みる海よ、ははるむ海よ、いと楽しき豫言を我に歌へかし、
その動悸うつ胸の上にて倦むことなき戀のうれしき喜びと、
刹那に永遠を味はひ得る満足ときちがひとを我に歌へかし、
おお、汝のおもてに光あり陰あり記憶し難き色彩あり、
わがうれしきうろくづよ、わが空想よ、おお、更に深く行けかし。

オットワイニンゲルに與ふる

ああわがきよきオットワイニンゲルよ、
をさなきわが念頭にふかくきざみこまれて、
終生消しがたき記念となれる君よ、
われは今君のわれに働きかけし感化の力と、
わがかなしむべき淋しき愛の經驗と、
いまやうやく目醒めんとするわがうちの生命いのちの力とを、
ふかく反省はんせいしてわが生の行くべき道に迷ふ。

あわかの無意識のうちに限りなく繁殖するものよ、
彼等はその断片に於て汚るる如く見ゆ、
されどわがきよきオットワイニゲルよ、
彼等はやがて新しき生命いのちとよろこびに生きかへり、
盛んなる意識の火に燃ゆるを見よ、
生殖の打勝つべからざる羞惡しゅうをの念ねん、
童貞と獨身の洩らすべからざる嬌慢の心、
われはそのいづれを慕ふべきかをみづから知れり、
されどかの生命いのちに反抗するものの寂寥と、
生命いのちを信じてそれを愛するものよるこびを思ふ時、

われはいまそのいづれの道を選ぶべきかに迷ふ。
ああわがきよきオットワイニゲルよ、
ペートーヴェンのやどれる旅舎りょしゃの一室に坐り、
そのシステムを貫かんために死せし君よ、
われもまたわがシステムにしうねく従ひ、
ふかくうちに食ひいるにがさいたみを忍びたり、
されど君よわが靈は今しののめの風爽かに吹き來る如く、
わが本能とともに新しくめさめて、
生命いのちよりはなれて生命いのちに生きんとするは、
全くわれに不可能となりぬ。

しかもわが生命のめざめは遅し、
しづかにうちより湧きおこる力をまたん。

青い煙

＊

丘の上の湖水にうつるひとすぢの青い煙、
青い青い空よりも青い煙、
日光のうちふるふ朝風のひいきとどもに、
ああうちなびくうちなびく音もなく……

＊

ややしばし主人の手をのがれて、

土手ゆくわれどならびてあゆむあめ牛、
ふとみづからの引きずる手綱を踏みて、
しづかに草枯れのうへにとどまれり。
あどを追うて走り来る主人よ、
この愛らしき大いなるけものを、
しかる勿れ、
またそのかたき鞭をあげて、
むちうつなかれ。

*

わが微妙なる本能を織りなす力、

盛んなるリズムよ性の力よ、
絶ゆる勿れ破るる勿れ、
一滴もわが外にこぼるる勿れ、
わが脳髓に心臓に、
のぼりゆけ、走りゆけ、いと深くしみとほれ、
わが視神経、聴神経、
骨と肉との根もとにふかくしみとほれ、
全身の血管の節々をめぐりゆけ、走りゆけ、
一滴もわが外に失ふ勿れ、
こぼるゝ勿れ、やぶるる勿れ、

夜毎に覗がふ盗人のするき目を忘るる勿れ、

盛んなるリズムよ性の力よ、

微妙なるわがうちの組織のなかに氣狂をうたへかし、

いのちと春とよるこびを小躍りしつゝ叫べかし、

盛んなるリズムよ性の力よ……

✽

わが妹よををしかれ、

われらの生れし日のやみを思ひ出す勿れ、

かなしきいのちのはのはを掻きたつる勿れ、

わが妹よををしかれ、

おん身の成熟せる葡萄の汁をやぶる勿れ、

おん身の全身にみなぎるリズムをそこなふ勿れ。

雨

＊

ひとりの旅の窓に、
春の雨がさびしくふりかゝる、
わたしのかよわいのちの上に、
くらいかげがかすかに落ちてふるへる。
心をとりなほしてしばらくそれを見つめてゐると、
湧きちる泉の上に亂れ落ちる雨を見るやうに、

かよわいわたしのいのちもひたくと強みを帯びて、
人知れず満ちくる力をひとり味ふ……

六六

＊

雨がふる―海に、人家に、
小さい湖水に、畑の青い麥の穂に……

麥の穂に雨がふる、黒い土にも、
籬根にちかい桃の花にも、

湖水の上に雨がふる、土手の草にも、

うすぐろい反射の水をとりまいて、

雲母のやうな海の上に雨がふる、よくは見えねど、
いや／＼海にかさなる空の上にも……

雨がふる―けふりの出ない煙筒に、
街道に添ふ人家のうへにも、うすぐらく……

＊

たつたひとりで行つて、

六七

かへつて來ても……

かへつて來てもおなじこと……
否いやいや……

菜の花ぐもりちらりくど雨がふる、
さきよりももつと淋しいこゝろの圃はたに、

かへつて來ても自分の圃はたをたがやすに、
助手たすけのあらうはずはない、

ものほしさうな顔をして手を拱こまいて、
ひとつしかない自分の圃はたを荒らすまい。

✽

しづかな涙のにじむやうに、
こゝろのおもてをくもらしてゆく、
青い水蒸氣のかげ……
他人のつめたい顔よりうける
はげしい動亂のあらしは過ぎゆき、

たゞ青い水蒸氣のかけ……

＊

濃藍の海の色をそのまゝに
峰より峰にそまゝりゆく夕ぐれのにはひ……
やむとさのないわたしの心臓の動悸のなかに、
餘り廣くもないわたしの職業のなかまのうち、
けふも争ひと疑とねたみがしのぎをけづる。
わたしは今はまだ明日を思ふ、明日だけがわたしに
かるい慰めとよろこびを與へるから……

わたしはかなり自然を愛してはゐるけれども、
猶それよりも今日はもつと深く人間を愛したい。

＊

ひとりであるときよく流れた涙が、
此頃はすこしも流れやしない、
餘程の刺戟でも起らなければ、
夜着をしぼるやうなあんなあんなにいらしい
なつかしいやさしい心などはもう起りやしない、
荒い荒い傲慢と剛情がいよゝゝ強くなるとともに、

臆病と躊躇がいつもそれに逆流をつくる、
 わたしには破つて行きたいと思ふ心があるばかりで、
 自分の両手を振つて眞實に破つて行く力はない……
 わたしの心の奥に濃かににじむ愛の思をさへ、
 からだと顔と言葉をもつてあらはすことを知らないために、
 ひどりで涙ばかり流してゐたが……
 あんななつかしい涙などはもう流れやしない。

*

けふは一日わたしの口のなかにながい唾がたまる……

新菊の白い花路傍の青い草はれづしい海の色……
 わたしの目には美しいかげがけふはしみづ映らなう、
 口のなかにはにながい唾がたまる……

にながい唾がたまるたんびに、
 わたしはそれをどくどくどのみこむ、
 わたしの友よ、わたしのけふの幸福と自由のために、
 わたしにかゝはるすべてのことに干渉したまふ勿れ、
 よしやわたしがおとしあな陥穽の前に立たせられたとしても、
 そこに落ちる時にはわたしたつたひとりで落ちるから……

＊

わたしの自我よ、
わたしはお前の奥の奥にある絶壁をきりくづさう、
わたしの惱める自我よ、わたしはお前の眞實を掴まんために、
お前の奥の奥にある絶壁をきりくづさう、
そしてわたしはお前の顔に壯嚴なる表情を見出さう、
そして眞實をもつてお前を禮拜しやう。

奈良より

迦旃延像 (問答師作十大弟子の一)

そのふるへてゐるあなたの両手りょうての指、
強い感激のために變動するあなたの眉、
あまりにはげしい心と言ひあらはそうとなされても、
どうしてもいひあらはせないやうなあなたの開いた唇—
わたしは今あなたのうちに流れる宗教の泉を、
その動いてゐるあなたの指と唇と眉とから、
あくまでもうけいれて深く深くあじはふ……

羅喉羅像 (問答師作十大弟子の二)

七六

両手りょうてをかたく組みあはせて全くそれを前の袖に包み、
何か深く思ひさだめて動かうとはなさらぬ、
しかも細目ほそめにあいた目と婦人のやうな唇とは、
堅くならうとする全身のいきほひをかるめて、
仰いでゐるとわたしの心にそそいでくる静かな生命いのち、
強い強い心を統御するやさしいなつかしい生命いのち……
わたしはただ仰いであなたよりくる生命いのちにうるほふ。

愛

いひあらはせない愛のくるしみにくらべて、
更にいたましくやるせない心がどこにあらうぞ、
いひあらはせない強い深いわたしの愛のために、
誰かがわたしをにくむやうになつたならば、
それよりもいたましくつらい心がどこにあらうぞ、
けれどもわたしはたつたひとり愛してゐやう、
誰も知らないわたしの心の絶壁のかけに坐り、

七七

たつたひとりで苦しい愛のさかづきを飲んでゐやう、
わたしの心の絶壁に消えないしるしをつけて、
いつまでも私の目を引きつけてゐる多くの名、
わたしはいつもそのなつかしい名に唇をあてて、
なやましいおもひでにおのれを失うてゐたい……
愛よ愛よ人間には萬人を愛する力がありながら、
どうしてそれを自由にあらはす術じゆつに缺けてゐるのか。

檜

けさ立ちのぼる青い水蒸氣のかけに、
黄ばめる檜ひのきの木末こすえはけふれるやうに立てり、
すがたよき十四五本の檜ひのきの並木は、
わかやぎし少女をこめらの立てるよりもこちよし、
ふしぎなるいのちは木木きぎのなかにつよくよみがへり、
聲なきよるこびと未來をしづかにうたへり、
ああもとの木を忘れずに歸り來きたれる檜ひのきのいのちよ、

汝は果してこの冬の間静かなる同じ木の間のみ眠れるや。

八〇

若葉

いかなればかく悲しき日の長くつづくや、
日の立てば忘らるべしと思はれし日の、
いかなればかく久しくわが前に消えざるや、
死にたしと思ふ日さへいくかつもりて、
わが目の前にかくはしき若葉はしげれり。

八一

われは狂せり

わが耳は急にはげしく鳴れり……

われは忽ち全身の知覺を失へり……

……
われは狂せり……俄かに全身は燃え上れり……

輕蔑と冷笑は氷河の如くわが頭上^{づじょう}を走りゆけり……

……
人は皆その本性を我に向つてあらはせり……

犬に對する外あらはさざる態度を……

……

姪賣婦に對する外あらはさざる態度を……

痴人に態する外あらはさざる態度を……

……

人は皆枯木となれり

人は皆枯木となれり……歩あそく枯木となれり……

恐れはわが心をつかみわが足はその前より退けり……

禮儀を知らざるものを捕へよ捕へよと彼等は叫べり……

利己主義なる彼れを捕へよ捕へよと彼等は叫べり……

恐れはわが心をつかみわが足はますくその前より退けり……

人は皆枯木となれり……歩あそく枯木となれり……

わが目はくらし……

死

死にたしと思ふ日のいくかどなくつづけり……
心の奥にきりくづされずにのこる絶壁のなかに、
ひとり窮屈に閉ぢこめられて生きんよりは、
早く死にたしと思ふ日のいくかどなくつづけり。

心の奥にきりくづされずにのこる絶壁を仰ぎ、
われはしばく涙を垂れて祈りもがき髪をかきむしれり、

死にたしと思ふ日はいくかどなくつゞけり……
心の中にては猶よく生きんことをこひねがひつつ……

ある夜

ひややかなる暗^{やみ}は部屋にただよひ、
窓ぎわのほのじろきあかりを照らせり。

われはただひとり床^{こゝろ}の上に目さめて、
わが強健なる心臓の鼓動を聞き、
こめかみに脈搏^{みやく}つ音楽を聞き、
兩股^{りょうもも}に満干^{みぢ}するあつき血の急湍^{はやせ}を聞く。

丘のかなたを軋りゆく電車のひびきと、
前栽せんざいに雨どふる蟲の聲とは、

こちよき興奮と沈静を神経に與ふ。

わが意識はひややかなる暗みにてらされ、
ほのじろきあかりにかげる。

此時前栽せんざいのやみのなかに、

或ひは夢みんとするわが意識のなかに、

ひとしづくのつゆは落ちたり。

かくて我は待てり、

ふたたびやみに落ちんしづくを、

しづかなる夜よるのこだまを。

われは待てり、

枝より枝に、木の葉より木の葉につたふ、

つめたき水蒸氣のつゆと凝るを。

われは待てり、
ふたたびやみに落ちんしづくを、
しづかなる夜のこだまを。

われは猶待てり、
わが夢に、或は前栽のやみのなかに、
しづかに落ちるしづくを。

大正三年十月五日印刷
大正三年十月十日發行

定價金卅五錢
郵税金四錢

著者 佐藤 清

發行所 兼 印刷人 神戶市吾妻通三丁目十七番屋敷 菅間 徳次郎

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目 警醒社 書店

發行所 神戶市鯉川筋 福音舎 書店

印刷所 神戶市吾妻通三丁目十七番屋敷 福音印刷合資會社神戶支店

不許
複製

民國卅四年十月廿一日

